日本福音ルーテル教会　教会史資料編纂委員会ニュース

歴史は語る

2017年8月15日発行　第12号　　編集責任者　青田　勇

特集「大学、神学校の移転」

日本ルーテル神学大学・神学校の三鷹移転

徳善義和

戦後再開から大学認可へ

1925年に中野の鷺宮に移転、日本ルーテル神学専門学校のとなっていた校地、校舎は、第二次大戦中の諸教派合同による日本基督教団の成立に伴って、合同の神学校のひとつとして戦後も暫く用いられていた。戦後暫くのルーテル教会神学生もそこで教育を受けていたが、やがてルーテル教会に返却され、学校としてのなんの認定もないまま日本ルーテル神学校（教養科2年、本科3年）としてルーテル教会の牧師養成を始めたのだった。

1969（「新建築」第45巻7月号掲載）

東京都から各種学校の認定を受け、学校法人となったのは1954年のことだった。私はその年に大学卒として本科一年に入学したのだった。この経過の中で神学校理事会は早い機会に戦後の学制に即した大学の認定を目指していたというが、文部省との長い折衝の末、漸く1964年4月から神学大学（4年制）の認可を得たのである。しかしこれにはひとつの条件が付いていた。校地、校舎とも数年の内に大学設置基準に適うこととという条件である。

このためには間垣洋助教授（当時）が主として文部省との折衝に当たり、必要な膨大な書類の作成には事務の森川夫妻が当たられたと後に聞いた。（私はこの神学大学開校と共に、専任講師として1964年に赴任したのだった）。

新しい校地、校舎などの計画

理事会はそのために協議を重ねたが、丁度その頃国際基督教大学がその広大な敷地の一角に諸派の神学校を招きたいという意向をもっていたので、東京神学大学に続いてルーテル神学大学も現在地の譲渡を受けることができたのだった。理事会は早速新校舎建設のための建築委員会を指名し、私も専任教員の若手の一人として（また工学部土木工学科卒を見込まれてか）、この委員会の末席に連なることとなった。

設計者の決定は村井資長氏の早稲田大学における経験を背景にした推薦があって、著名な村野藤吾氏に決まったが、同氏は神学大学の建築計画ということについて洞察ある助言を求められた。これに関わる教会間の協議に逸早く応じたアメリカのルーテル教会は教会建築を専門とする建築家ソヴィック氏を計画顧問として送ったので、村野氏は同氏と共に京都、伊勢などの日本の宗教建築を見て回り、ソヴィク氏は滞日の終わりに、大学理事会と村野氏のために、自らの考えを講演し、それを『神の民の家』（竣工時に新書版として出版）という文書にまとめた。チャペルを中心とする全体計画の基本理念の提示だった。「神の家」ではなくて、「神の民の家」であること、そのためにチャペルを中心として建物全体がその方向に向けて計画されることが大切だという考え方である。

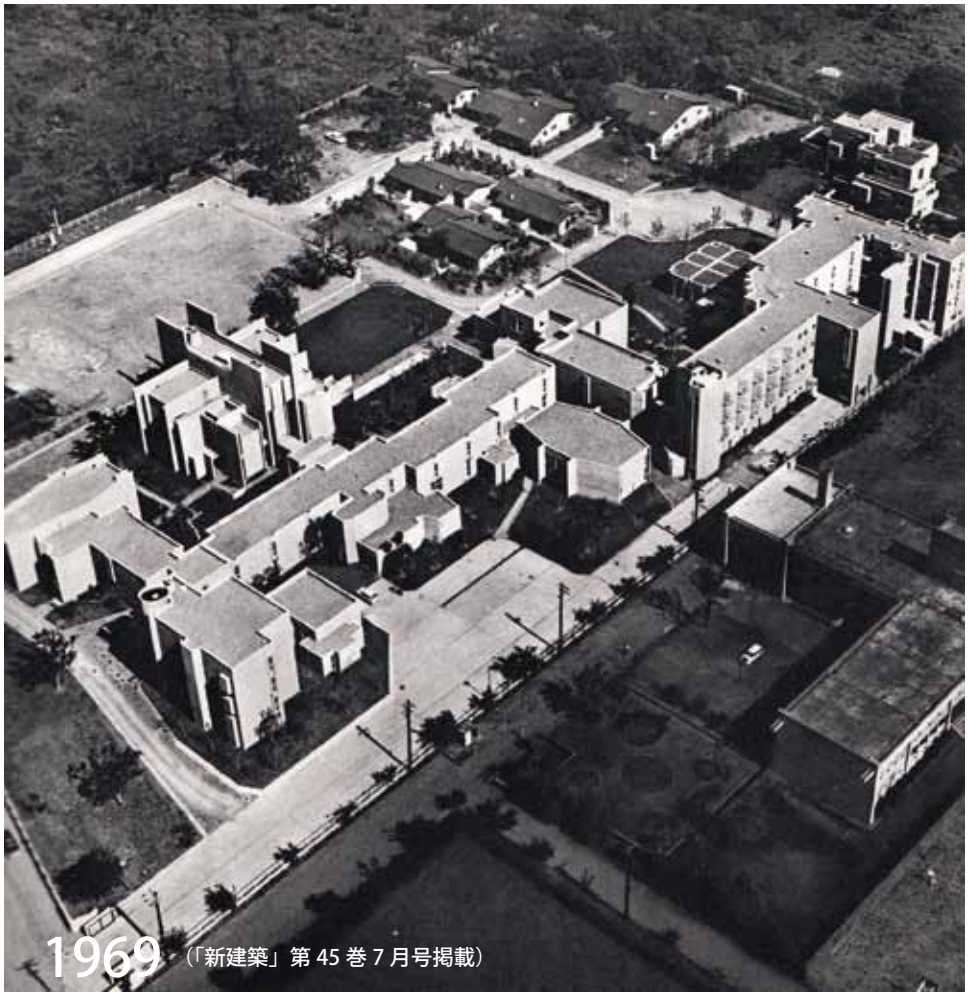
鷺宮の日本ルーテル神学校

こうして村野氏はチャペルを中心に本館、図書館、寄宿舎を配した総合計画を具体化し、特にチャペル本体とその周辺については一石の配置に至るまで現場で指示を与えて、これを1969年9月に完成に至らせたのだった。当時の著名な建築雑誌数誌はこぞって特集を組んで、村野氏の設計によるこの小さなキリスト教系大学の総合計画の理念と実際を紹介したのだった。

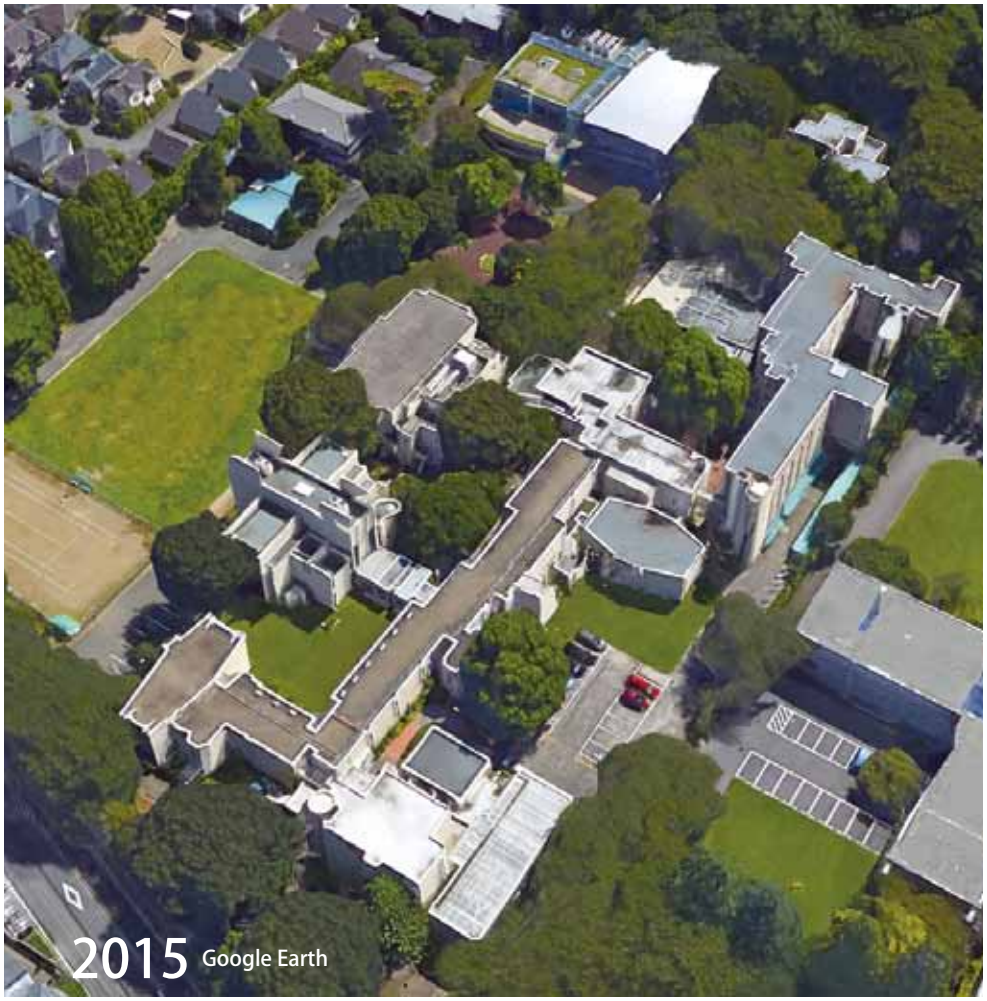
鷺宮からの移転

鷺宮からの移転は、その土地の売却先への引き渡しの期限もあって、完成より早く、1969年春に行われ、夏までは事務も授業も校地の一角にプレハブ校舎を建てて対応したのだった。折しも学生紛争が盛んな頃、本学でもそれぞれの学生グループがそれぞれの主張を掲げた抗議や教室封鎖なども起こったが、ある程度まで教員との対話もあって、69年の終わり頃から通常の状態の中で大学の日々が送られることとなったのは幸いだったが、これをきっかけに大学を去った数人がいたのは残念なことだった。事実主張を掲げて教授会と対立の立場にあった学生たちまでが、実際の移転に当たっては全面的に協力したのだったから、その流れは後になって当人諸氏にも私たちにも互いに分かり合えるものだったと言ってよいだろう。神大卒となった学生たちは、以前からの各種学校神学校で牧師となる教育と訓練に励むことになっていった。

こうして定員に比べれば遥かに少ない数の神学生たちの、牧師への歩みが新しい校舎、校地で曲がりなりにも始まっていったのだった。



1969（「新建築」第 45 巻 7 月号掲載）



2015 Google Earth

神学校の東京移転（熊本から東京・鷺宮）

青田　勇

今から92年前の１９２５年に神学校が熊本から東京の鷺宮に移転した。すでに１９１１（明治44）年に九州学院の神学部として創設されてから14年の歳月が流れていた。

この東京移転に乗り出した背後には１９１６大正５）年から半年以上にわたって九州学院財団、宣教師会、ボードとの間で議論になっていた「神学校の分離・独立」に終止符を打つ事情があった。

「神学校の分離・独立」を検討しなければならなかった背後には、神学教授内容の改善、神学生の素質の向上と共に、教育施設としての学院の発展と拡大に全力を傾注しなければならない九州学院財団・学校責任者とミッションスクールとしての学院による伝道と日本人教職養成の使命を強く抱く宣教師会側との間に緊張と不協和音が潜在的にあったとみなければならない。

九州学院の直接的経営・管理から神学校を分離・独立する機構改革実現に向けての端緒を開いたのは１９１６年８月30日より９月２日の間、軽井沢にて開かれた第６回在日宣教師共同会議である。そこで神学校の機構改革として、次のように決議された。

「①熊本にある神学校の組織を関係するボードの管轄下に置く。②関係するボードが各々一名を選出し、代表として神学校に派遣する。③神学校の経費は、三つのボードが均等に負担する。」（ＪＣＬＭ 1916.8.20）

この議決内容には、分離という言葉は明確に記されていないが、「熊本の神学校の組織を関係するボードの管轄下に置く」という言葉の中には、煎じ詰めれば、九州学院の直接的経営・管理から教職養成を主たる目的とする神学校を独立させ、海外ボードの管理下に分離させることを意図していたと言える。

翌年の１９１７年12月４日、名古屋教会に開かれた第６回在日宣教師会共同会議は九州学院から神学校を分離・独立させるための検討委員会、通称「三人委員会」を指名し、中学校と併設されている他教派の神学校を調査することとした。

指名されたE・T・ホールン、A・J・スタイワルト、J・P・ネルセンは半年以上かけて、中学校と併設されている神学校を持つ関西学院、青山学院、同志社、明治学院、東北学院の学院長との間で文書による聞き取り調査を行い、神学校分離案をつぎの四項目にまとめて、１９１８年８月20日に軽井沢で開かれた第８回在日宣教師共同会議に提案した。

「①分離した神学校を九州の地に置くことに委員会全員は賛成する。②神学校が九州学院の一部として存続することに賛成する。③中学部と神学部が分離した後、神学校を設置する。④神学校の場所は、熊本か、それとも福岡のどちらかとする。」（ＪＣＬＭ 1918.8.20-26）

この④の提案である分離した後の「神学校の場所は、熊本か、それとも福岡のどちらかとする」に関しては、議場で、委員であるホールンから「神学校の場所を福岡とする」との修正動議案が出され、賛成多数で承認された。

こうして、分離する神学校は組織上は九州学院の一部として存続するが、設置場所は福岡とすることで、この時点での一応の方向性を宣教師会は確認した。

同年10月20日から25日、４日間、佐賀教会で第22回年会が開催された。出席議員は総勢32名。日本人教職17名、宣教師７名（夫人除く）、準議員８名（補助伝道師、婦人伝道師など）である。そこで「神学校移転問題」が正式に報告され、質疑・意見交換が行われた。

移転場所に関して、その年会では日本人教職の間から多様な意見が発生したが、それらは希望的観測の中での意見でしかなかった。なぜなら、宣教師会の協議とボードの承諾を得ることなしには、いかなる日本での教会資産の取得は可能ではなかったため、年会は日本の教会資産の管理と取得について決定権を有していなかったからである。

「神学校移転」に関する場所の選定を最終的に決着できるようになったのは１９２１年の秋に入ってからである。９月12日から15日にかけて、教役者修養会に引き続き、兵庫県有馬のユニオン教会で行われた第２回総会において、財産の決定権を持つ「宣教師会」において、その協議が先ずなされた。C・K・リッパードにより、「神学校位置調査委員会」報告として、他教派による神学校の情況に関する補足的説明と共に、「場所を検討した結果、九州よりも本州が一番適当であり、その中で川崎または東京が候補場所として相応しいと判断する。」との提案が行われた（ＪＣＬＭ 1921.9.12-15）。

1921-22　神学部の教授と学生

この委員会の提案を受けて、「宣教師会」は、最終日の15日午前中、「神学校の移転場所を将来は東京と定め、移転のための敷地を東京に購入する」との決議を採択し、すぐに「年会」に報告し、神学校の「東京移転」計画はここに最終的に決着した。

秋の気配が感じられる1924（大正13）年10月上旬、神学部を直接的に管理・運営する九州学院財団理事会は東京で会合し、東京郊外に神学校用地を購入することを確認した。その場所は、当時の地名に従うと、東京府下豊多摩郡野方町下鷺宮921、敷地面積は2600坪である。

そこは東京の都心からあまり遠くない、武蔵野特有の丘陵地帯で、櫟（くぬぎ）の叢林（そうりん）と大根畑の中に農家がわずかに点在する土地であった。校地となる敷地の購入経費の4万6千円はボードから支援金で賄い、九州学院財団の名義で登記された。

翌年の1925（大正14）年春から建築工事が始まり、8月までに32名の神学生を収容できる二階建ての大きな寄宿舎一棟と四件の教師住宅が5万5千円の費用でほぼ完成した。なお、その内の約1千円は日本の教会からの献金であったが、それ以外の資金はボードからの支援金に依った。

同年6月17日、熊本での送別会が行われ、その翌日の18日、完成して間もないブラウン・メモリアル・チャペルで九州学院神学部の最後の卒業式が挙行され、直ちに設備品、諸道具、図書の搬出作業に取りかかった。

東京に移転した教授はネルセン校長、J・K・リン、三浦豕、佐藤繁彦、浅地昇の教授5名。神学生は本科2年の福山猛、本科1年生の川桐新一、松岡幹三、予科2年生の山内六郎、高瀬義正、坂井賢男、青山四郎、予科1年生の内海季秋、武藤稔の9名であった。これらの神学生は、敷地の西側に新築された寄宿舎に入った。3名の日本人教授は、ニューヨーク州のルーサーリーグ（青年連盟）が献金した5千600ドルを資金として、8月に新築された教師住宅に落ちついた。ネルセンとリンは敷地地内に宣教師館が完成するまで、阿佐ヶ谷駅の北側、阿佐ヶ谷町487番地の借家に約二ヶ月ほど仮寓した。

▲建築前の鷺宮の敷地

現在の鷺宮周辺（Google）▶
中央のマンション（白鷺ハイム）の敷地が
ルーテル神学校の校地であった

同年9月10日午後3時から神学校の仮校舎献堂式が82名の参列者を得て、挙行された。

補足として加えれば、かねてより文部省に申請していた神学部の名称と学則の変更が1926（昭和元）年3月31日付で正式に認可され、正式名が「日本ルーテル神学専門学校」となった。

神学校寄宿舎・校長住宅

神学校教授住宅 1926

移転特別決算報告(1965年～1969年) 第4回総会報告より 1970/5/1			
収 入			
支援金	土地購入のため	280,000,080	JELC,NRK,シェペード基金
寄付金		28,907,134	ドイツ、LWF
補助金	国庫補助金	2,279,000	
借入金	私立学校振興会	33,100,000	
資産売却金		634,148,110	土地売却金
その他		15,046,208	
収入合計		993,480,532	
支 出			
管理運営費		3,820,000	移転費ほか
資本的支出	土地購入費	280,000,000	
	建築仮勘定	573,444,210	設備備品費含む
	有価証券	126,479,740	
	その他	281,800	電話加入権ほか
借入金償還	私立学校振興会		1971年度より償還
借入金利息	〃	2,254,782	1969年度支払分のみ
その他の支出		900,000	
経常会計繰出		6,300,000	
支出合計		993,480,532	

日本ルーテル神学大学(神学校)の三鷹移転の経緯

1963年6月7日	理事会。ICU(国際基督教大学)がキリスト教教育センターの神学科設置として、日本ルーテル神学校、東京神学大学、聖公会神学院に呼びかけ、土地提供の用意があることが岸校長より報告。
1963年7月28日	移転調査委員会報告。ICU校地の分譲に応じることを妥当と判断する。
1963年8月16日	理事会。移転調査委員会報告の報告及び卒業生のアンケートを参酌し、移転を決定し、早急に一万坪程度の土地を購入することを決議。併せて、「移転後の鷺宮の土地建物は歴史的記念の土地であるので、JELCの適当なる教育施設のために使用することを希望する」との決議を行う。
1964年1月25日	文部大臣より大学設置認可を受け、4月から4年生大学となる。名称も「学校法人日本ルーテル神学大学」に変更。
1964年5月23日	第一回移転調査研究委員会報告。委員10名で構成。教会側から田坂惇巳、ソーレンソン、浜田光行、石居正己、三浦義和、理事会から本田伝喜、岸千年、ハドル、川西誠、山内六郎。大学及び大学院の設置基準により、土地は8千坪から1万坪のこと。価格は3万円6千円位。まだ折衝の余地があり、神太の申し入れは2万5千円～3万円。ICU交渉委員委員5名を定め、委員長・本田、岸、浜田、ハドル、ソーレンソンとする。移転報告書作成委員をハドル、石居、三浦義和、ソーレンソンとし、全教会、支援団体に周知する報告書を作成する。海外支援教会のボードに事業計画5億5千420万円の申請報告を作成(土地2億1千万円、建築3億4千420万円)。
1966年1月31日	建物移転計画実施委員会の下に小委員会(山内六郎、Ｅ．Ｈ．チューズ、牛丸省吾郎)を設置し、大阪教会員・建築家辛木貞夫氏、市川教会員・建築家稲富昭氏、飯田教会員・建築雑誌「近代建築」社長片桐軍氏から建築全般、設計担当者、施工会社の選定について意見を受ける。小委員会は経歴、業績、人柄から次の三氏を設計担当候補者として推薦する。村野藤吾、谷口吉郎、大江　浩。米国ルーテル教会の建築家ソヴィックをコンサルタント・アドバイザーとして招請する。
1966年5月1日	理事会。以下の内容を承認する。①ICU構内に移転する。②土地はICUの敷地7,000坪を譲受ける。③土地の価格は坪当たり3万円、他に坪当たり3万円寄付として計2億8千万円とする。この資金はLCA、ALC、ミッズリーシノッド・ジャパンミッションの三つより援助を受ける。④資金調達方法は現在の大学敷地を売却してこれに充てる。但し、資金に余裕のあるときは現在の建物を記念として保存する。⑤大学の基本金を設定する。⑥大学の移転については理事会が責任をもつ。
1966年5月3日	ICUへの土地移転に関する報告を日本福音ルーテル教会の第二回総会(日本基督教団淀橋教会)で行い、承認を得る。
1966年6月15日	日本福音ルーテル教会常議員会「日本ルーテル神学大学理事会報告」。「第二回総会で承認を得た神大理事会の土地購入の契約と実行、建築計画促進ついて努力がなされている。村野籐吾氏に建築設計、管理を依頼することを決定。」
1966年度	日本福音ルーテル教会の第三予算に日本ルーテル神学大学の土地取得支援金として、2億8千万円がアメリカ教会(LCA,ALC,LCMS)から送金される。
1966年7月22日	ICUの構内への移転に関する契約書の調印(神大理事長・本田伝喜、ICU理事長・湯浅八郎で交わす)。
10月5日	土地売却支払い完了。土地7,000坪、土地代金2億8,000万円。
1966年11月14日	理事会。「移転に関して、ドイツのルーテル教会からの援助を申請する。①土地7,000坪はICUから購入済み。②建築(大学本館、寮、教授住宅)費及び関係諸費は約4億5,000万円の予定であり、その大部分は現在地(鷺宮)の売却により捻出する。③上記総額4億5,000万円中、ドイツのルーテル教会より援助金として5,000万円を申請する。その内訳は礼拝堂3,000万円、図書館2,000万円。」
1967年8月25日	白鷺2丁目848-7、旧青山邸宅143坪5を坪当たり15万円1千5百円で日本無縁工業株式会社に売却。
1968年3月1日	理事会。ドイツ福音ルーテル教会連盟(EKD)の援助金5,000万円が約束される。
1968年7月24日	住友商事と旧神学校敷地・鷺宮の土地譲渡契約を交わす。
9月10日	理事会。建築計画と工事業者・鹿島建設に決定。
9月24日	鹿島建設と本体工事契約を締結し、起工式を行う。
11月13日	理事会。大学院設置申請取り止めを決議する。
11月20日	第一回神学生、抗議及び要求文提示し、神大紛争始まる。
12月	電気・暖房・給排水工事を契約。
1969年1月20日	三鷹用地に住宅の一部完成し、教員の第一陣移転開始。木造住宅の内、3戸完成、残りの3戸は2月に完成。
1月31日	神学校卒業予定であった9名の学生の「宣言」が発表される。
3月24日	旧礼拝堂にて礼拝と卒業証書の授与、鷺宮での学校行事を終了。
3月27日	図書の移転始まり、数日かけて、3万冊の図書を府中にあるALC所有の建物に一時保管のために搬送。
3月27日	譲渡された土地で「白鷺ハイム」の起工式が行われる。
3月末	文部省管轄の「学校法人日本ルーテル神学大学」となる。
4月9日	9日から11日にかけて日本通運により鷺宮の本館の移転を完了。同時に礼拝堂を日吉教会に移転する作業開
4月15日	住友商事へ旧神学校用地(鷺宮)を最終的に引き渡す。
4月30日	深夜にルター寮の移転を完了。
5月13日	大学入生学式(大学1年4名、2年2名、3年2名、聴講1名)。
5月20日	プレハブ教室他を使って授業を開始。
8月30日	チャペルを残して本館(3,383.16㎡)がほぼ完成。
10月12日	日吉教会に旧神学校チャペルを復元し、献堂式を行う。
12月14日	礼拝堂が完工し、引き渡し。
12月15日	落成感謝礼拝。